

これからの大学英語教育における L L の役割

早坂慶子

目次

- 0 はじめに
- I L L は「聞く力」「話す力」の向上に役に立っているか
— アンケート結果に見る学生の L L 評価
- II 英語の「聞く力」「話す力」の到達目標はどこにあるのか
- III 目標レベル到達のための L L 利用
— コミュニカティブ・アプローチによるタスク練習
- IV まとめ

0 はじめに

1990年代、「大綱化」により日本の大学での外国語教育は大きな転換期に立たされている。この時期にあつて松山は大学における英語教育の意義として 1) 英語基礎力の養成 2) 専門科目に直結した英語 (E S P) 3) 運用力を重視したコミュニケーションに役立つ英語教育 4) 異文化理解の促進に英語学習を生かすこと、の 4 点を挙げている (松山1993: 51-52)。小池その他の過去10数年にわたる調査の結果を見ても、教員、学生、職業人それぞれの立場から、コミュニケーション能力を高める英語教育の実現が望まれていることは明らかである。(小池ほか1983, 1985)。

また一方ではテクノロジーの発達にともない、L L, V T R, C A L L などの機器を用いた英語教育への関心も益々高まってきており、それに合わせたソフトウェアの開発も盛んに行なわれている。これらの機器の中でもっとも早い時期から導入されている L L に対しては、「一般英語での望ましい機器である」「L L 授業に、大部分の学生は好感を持ってい

る」(小池ほか1985:92)という意見もあれば、「機器の進歩に使用者が追いつけない」「多機能で使いにくい」「授業が単調に流れる危険性がある」(吉永1993:20)など、LLに対し否定的な意見も聞かれる。本研究において筆者は、これまでLL機器を用いて英語教育に従事してきた経験を踏まえた上で、今後変わっていくであろう大学英語教育の中でのLLの効果的利用を考察する。本論の構成は、次のとおりである。第1章では、筆者の担当するクラスの学生を対象に行なった、LLに関するアンケート調査の結果を見ながら、学生のLLに対する評価とニーズを分析し、今後の指導法を探る。第2章では、同じくアンケート調査による英語の「聞く力」「話す力」の到達目標の結果を分析する。また、学生の目標達成のためにLLを使った授業で何ができるかを考える。そして第3章では、LLを使ったコミュニケーション能力を養うための1方法として、コミュニケーション・アプローチによるLLを使ったタスク練習を考える。

I LLは「聞く力」「話す力」の向上に役に立っているか

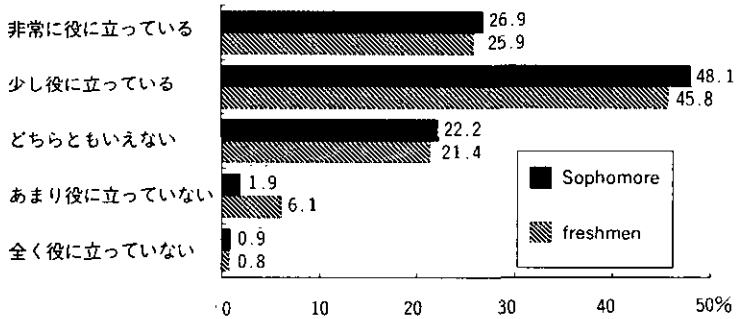
ーアンケート結果に見る学生のLL評価

筆者の勤務校英文学科英会話I、II(必修科目)履修者(I-1年目学生131名、II-2年目学生108名、計239名)に、LLで取り扱っている事柄が英語の「聞く力」「話す力」の向上にどのくらい役立っているか、アンケート調査した。実際にLLで取り扱っている項目⁽¹⁾についてどのくらい役に立っているかを、1(まったく役に立っていない)から5(非常に役に立っている)の5段階で答える方式をとった。

(1) ダイアローグ

テキスト各ユニットの最初に出てくるダイアローグのリスニングとリピート。英会話I、IIの履修者ともに約1/4がこれを「非常に役に立っている」と答えている。会話の中の語彙、会話的表現などが学習項目に入っており、学生のニーズが高い「日常会話表現をおぼえる」のに結びつきやすい練習ととらえているものと思われる。

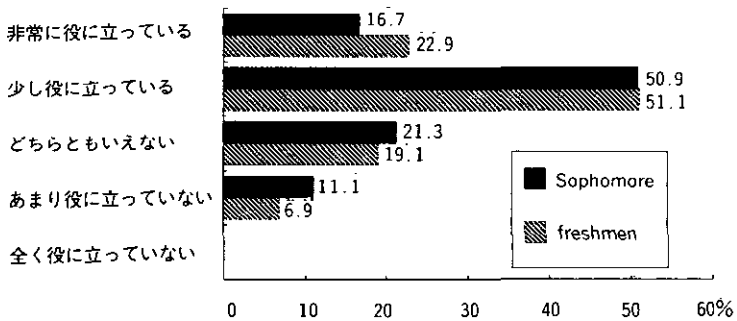
図1 ダイアログ



(2) リスニング エクササイズ

リダクションの聞き分けなど、テープの内容にそって各種タスクを行なうもの。「非常に役に立っている」と「どちらともいえない」がほぼ同数である。「少し役に立っている」の回答は約半数である。リスニングの典型的なタスクが盛り込まれた練習であることからすると、もう少し高い評価を期待したいところであるが、このタイプの練習を積極的には評価していないようである。

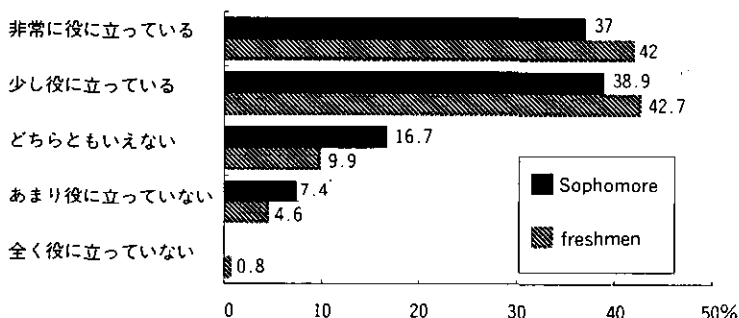
図2 リスニング エクササイズ



(3) パターンプラクティス

一般的にあって、パターンプラクティスに対する利用者の評価は、あまり芳しいものではないのだが、本結果を見る限り、学生はその多くが「非常に役に立っている」あるいは「少し役に立っている」と答えているのは注目に値しよう。

図3 パターンプラクティス



(4) リスニング・コンプリヘンジョン

英会話Ⅰの場合はミステリーを1エピソードずつ聞いて Comprehension Check に答えるもの。ストーリーの展開は興味を引くが語数が比較的多いこと、語彙レベルも高いものが入っていることなどから、「非常に役に立っている」という答えは約14%に止まった。英会話Ⅱの場合は、一回ごとにトピックが変わり、関連質問も豊富に盛り込まれている。日米の比較文化的要素も取り入れられている。「非常に役に立っている」と答えたものは22.2%と英会話Ⅰに比べると高い数字を示している。

(5) スモール・トーク

毎L L時間の始めに数名の学生が指名され、約1分間自分の選んだ話題について話すもの。発表者には、トピックの提示、内容説明の仕方について、主として構成のうえから指示が与えられる。発表している間、他の学生は「モデルヴォイス」で聞いている。この練習に対し、1年目学生は42.7%が、2年目学生は50%が「非常に役に立っている」と答え

ている。英会話の授業を通して「英語が話せるようになりたい」という学生が多いことを反映した回答であると考えられる。

図4 リスニング・コンプリヘンション

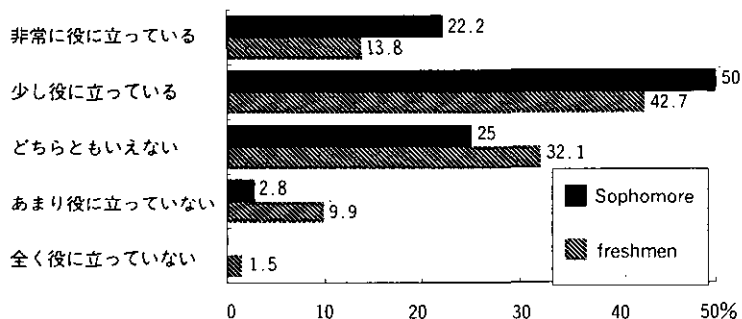
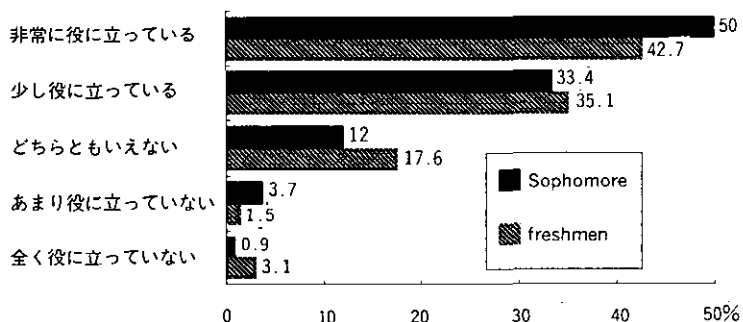


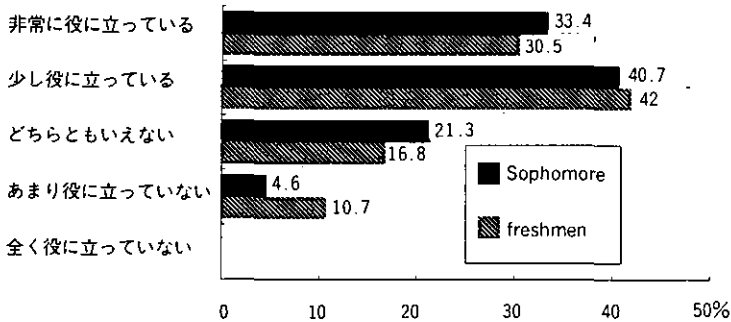
図5 スモール・トーク



(6) ペア・ワーク

1, 2年目学生共に約3割の学生がこの練習を「非常に役に立っている」と答えている。SONY LLC-9000はペアワークを行なうのにたいへん便利な機器であると筆者は考えている。ランダムな組合せが瞬時にできるので時間のロスがなく、毎回異なった相手とのペアワークが即座に実行できる。「いろいろな人と話ができる」「顔が見えないので緊張せずに英語が話せる」などが、学生の声としてあがっている。ここでも「話すこと」への積極性が伺える。

図6 ペア・ワーク

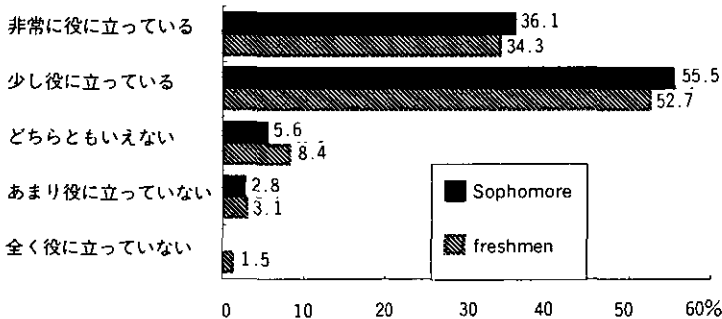


以上(1)から(6)まで現在LLで取り上げている項目について、どのくらい「聞く力」「話す力」の向上に役に立っていると思うかという質問に対する結果を示した。次に(7)、(8)では、LL全体と教室でのネイティブによる授業についての質問に対する結果を述べる。

(7) LL

LLが「非常に役に立っている」と答えた学生は約3割強、「少し役に立っている」が5割強と、概ねLLの有効性を認めていると受け取れる結果である。2年目の学生の方がわずかではあるが高い数字を示していることから、少なくとも今回回答した学生からは、LLが必ずしも一般的にいわれているように、否定的にはとらえられていないと推察できる。

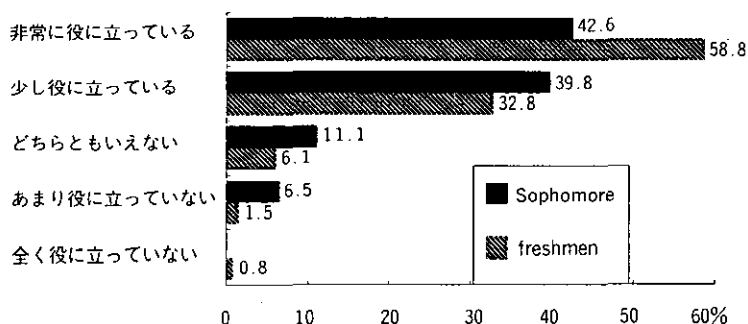
図7 LL



(8) ネイティブの授業

ネイティブスピーカーによって週2回、各45分行なわれる教室での授業（1クラス約15名）が英語の「聞く力」「話す力」の向上に「非常に役に立っている」と答えた学生は、1年目で58.8%、2年目で42.6%と、いずれも高い数字を示している。大学に入って実践的な英語力を身につけたいとするときに、ネイティブスピーカーとの出会いをその手段として評価していることが、特に1年目学生の高い数字から読み取れる。2年目で「非常に役に立っている」の回答が低くなったのは、ネイティブの授業以外にも英語力向上の方法を見いだしたことに起因しているのかもしれない。

図8 ネイティブ・スピーカーの授業



以上アンケートの結果を見ながら、学生がLLでの英語学習に対しどの程度各々の項目が役に立っているかを感じているかを概観した。教室でのネイティブスピーカーと同一教材を使用するという制約があるにもかかわらず、実際に取り上げている項目に対し「非常に役に立っている」あるいは「少し役に立っている」という回答が全体の大部分を占めるといった結果が得られた。また、「非常に役に立っている」と答えた項目を比率の高い順に並べると表1のようになる。

1, 2年目で順位の違いが見られるのは下位2項目だけで、上位4項目の順位は同じである。LLの特性を生かしたパターンプラクティスやペアワークが上位に位置しているのは注目に値する。学生の関心、そしてニーズは、「英語を聞く」ことより「英語を話す」ことへと傾いている

ことが、これらの項目をして「非常に役に立っている」と答えさせたとも考えられる。

つぎに学生が、英語の「聞く力」「話す力」について、到達目標をどこに置いているのかを調査した結果を次の章で述べる。

表1 「非常に役に立っている」項目

1年目		
1.	Small Talk	42.7%
2.	Pattern Practice	42.0%
3.	Pair Work	30.5%
4.	Dialog	25.9%
5.	Listening Exercise	22.9%
6.	Listening Comprehension	13.8%
2年目		
1.	Small Talk	50.0%
2.	Pattern Practice	37.0%
3.	Pair Work	33.4%
4.	Dialog	26.9%
5.	Listening Comprehension	22.2%
6.	Listening Exercise	16.7%

II 英語の「聞く力」「話す力」の到達目標はどこにあるのか

「英語を聞く力」「英語を話す力」の2項目について、1)現在のレベル、2)英会話II修了までに到達したいレベル、3)大学卒業時までに到達したいレベル、の3段階について質問した。レベルの分類についてはNAFSA (English Language Proficiency Chart by National Association for Foreign Student Affairs) を分かりやすく書きなおしたものを使用した。

English Proficiency Levels

1) Aural Comprehension Levels

Level 2 (Elementary Proficiency)

Understands answers, questions on daily personal needs and familiar topics if spoken very slowly and

distinctly ; often requires restatement in graphic terms.

- Level 3 (Intermediate Proficiency)
Understands most questions, statements and conversations on familiar topics spoken distinctly at normal speed ; requires occasional restatement.
- Level 4 (Minimal Academic Proficiency)
Understands most informal questions, statements, and conversation at normal speed ; comprehends lectures on familiar subjects with some difficulty.
- Level 5 (Partial Academic Proficiency)
Understands most conversations and most lectures on familiar subjects at normal speed.
- Level 6 (Full Academic Proficiency)
Understands academic and colloquial conversation, and most lectures with no difficulty.

2) Speaking Proficiency Levels

- Level 2 (Elementary Proficiency)
Asks and answers questions on daily personal needs and familiar topics with very limited vocabulary ; makes frequent basic errors in structure and pronunciation.
- Level 3 (Intermediate Proficiency)
Converses intelligibly with most social situations but without complete control of structure and pronunciation ; restricted academic vocabulary.
- Level 4 (Minimal Academic Proficiency)
Participates effectively, sometimes hesitatingly, in social and academic conversations ; makes occasional errors in idiom and structure, often obscuring meaning.
- Level 5 (Partial Academic Proficiency)

Participates effectively in social and academic conversations; makes occasional errors in idiom and structure seldom obscuring meaning.

Level 6 (Full Academic Proficiency)

Speaks fluently with only occasional idiomatic imprecision.

- (1) あなたは現在どのレベルにいますか。
- (2) あなたは英会話 I I 修了時まで、どのレベルに到達したいと
思いますか。
- (3) あなたは卒業までに、どのレベルに到達したいと
思いますか。

以上 3 つの質問に対する回答は次のとおりであった。

A. スピーキング

1 年目の学生ではその 74.8% がレベル 2 を、17.6% がレベル 3 を現在のレベルとし、その上のレベルであるとしたものは、わずか 7.7% である。「英語を話す力はまだまだ低いレベルにある」との意識が強い。そして英会話 II 修了までには 45.8% がレベル 4 まで、29% がレベル 5 までを到達目標とし、さらに卒業までには Full Academic Level であるレベル 6 に到達したいとするものが 68% であった。つまり、現在の「話す力」は低いレベルに位置するが、在学中にその技能を養成し、卒業時までには、「なめらかに話す」レベルにまで到達したいという気持ちが読み取れる。

図 9 1 年目学生のスピーキング到達目標レベル

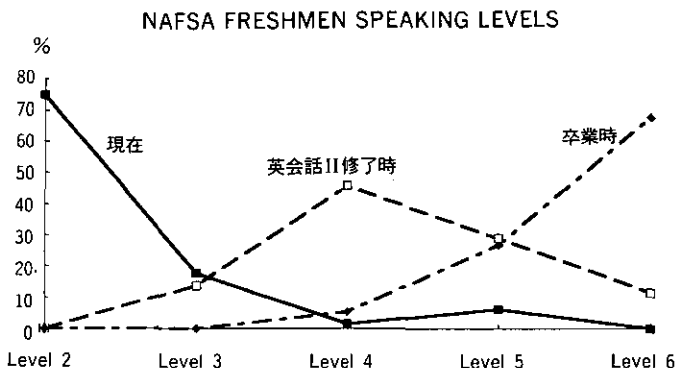
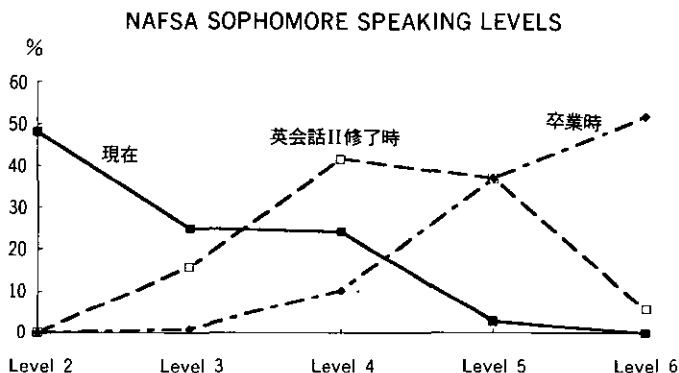


図10 2年目学生のスピーキング到達目標レベル



2年目学生の場合、現在のレベルを2とするもの48.1%、3とするもの25%、4とするもの24.1%と、やや散らばりを見せている。アンケート実施時より約10週間後に訪れる英会話II修了時までにはレベル4までを目標にするもの41.7%、レベル5までを目標にするもの37%となっている。卒業時の目標は、37%がレベル5、51.9%がレベル6である。1年目の学生の数字と比べると、卒業時の目標をレベル6におく学生が少ない。英会話II修了後卒業まで、「聞く力」「話す力」を養成するオーラルイングリッシュの授業が、カリキュラムに組み込まれていない本学の実情を反映し、最終目標レベルが5と6に分散したものと見られる。

B. リスニング

1年目学生の現在のレベルはレベル2が31.3%、レベル3が45.8%、レベル4が14.5%であり、スピーキングのように最も低いレベルに集中するようなことはない。次の英会話II修了時になるとこれに近似した比率で2レベルずつアップしたような形で表れている。ところが、卒業時にはレベル6に集中し、79.4%がそれを到達目標レベルとしている。

2年目学生の場合を見ると、高い数字を示しているのは現在のレベルではレベル3の44.4%とレベル4の37%である。英会話II修了時になるとレベル4が36.1%、レベル5が48.1%、卒業時にはレベル5が28.7%、レベル6が64.8%であった。

図11 1年目学生リスニング到達目標レベル

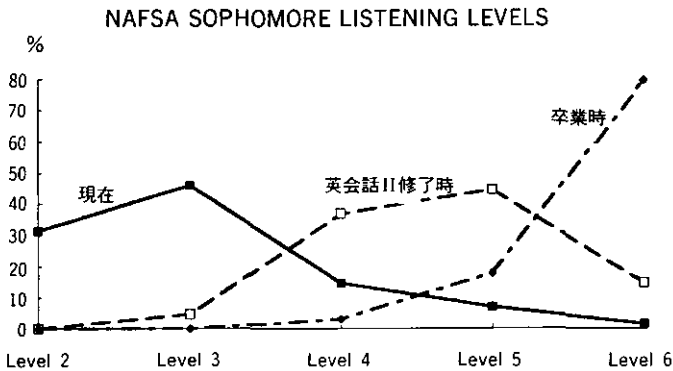
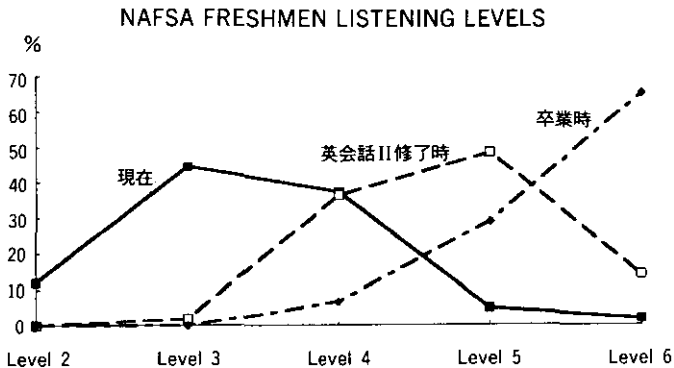


図12 2年目学生リスニング到達目標レベル



1年目, 2年目学生ともに, リスニングで卒業時の到達目標レベルをレベル6と回答した学生が, スピーキングでレベル6を選んだ学生を10%以上も上回っている。スピーキングに比べてリスニングは, 現在レベルも高いレベルに評価しており, Full Academic Proficiency には到達できるであろうという思いから, 卒業時にはレベル6に到達したい, あるいはできるという思いが表れたのかもしれない。

表2は, Academic Proficiency (Level 4, Level 5, Level 6)を回答したものの比率である。1年目スピーキングの場合, 現在このレベル

に達しているとするものはわずかしかない(7.6%)が英会話II修了時までには86.3%が、卒業時までには全員がこのレベルを到達目標としている。1年目リスニングの場合は、スピーキングよりやや多い22.9%が現在このレベルに達しているとしている。その割合は、英会話II修了時で高くなり(95.4%)、やはり卒業時までには全員がこのレベルを到達目標としている。

表2 Academic Proficiency (Levels 4 + 5 + 6)

		1年目	2年目
スピーキング	現在	7.6%	26.9%
	英会話II修了時	86.3%	84.3%
	卒業時	100.0%	99.1%
リスニング	現在	22.9%	43.6%
	英会話II修了時	95.4%	98.1%
	卒業時	100.0%	100.0%

2年目スピーキングの場合、現在このレベルに到達しているとするものの比率は1年目より高く、26.9%である。英会話II修了時までに残された時間が約10週間であるにもかかわらず、このレベルに到達したいとするものの比率は84.3%にあがり、卒業時までには、1名をのぞいて全員がこのレベルを到達目標としている。リスニングの場合は、現在でこのレベルにあるとするものは43.6%、英会話II修了時までにはほぼ全員の98.1%がこのレベルに到達したいとし、したがって、卒業時との間に違いはほとんど見られない。

2年目学生を1年目学生と比べた場合、英会話の履修に1年の差があることから、スピーキング、リスニングともに、現在 Academic Proficiency のレベルにあるとするものの比率は当然高くなっている。しかし、英会話II修了時、卒業時にこのレベルに到達したいとするものの数に学年の差はあまり見られない。

つぎにスピーキングをリスニングと比べた場合、現在レベルと英会話IIの段階で1、2年目ともにこの Academic Proficiency レベルに達している、あるいはこれを到達目標とするという学生の割合が低い。全員が最終的な到達目標はこの Academic Proficiency レベルであるとしな

がらもそれに至るまでの段階では両スキルのギャップが大きい。

本学のカリキュラムでは、3、4年次に1、2年次のようなオーラルイングリッシュが組み込まれていないことを踏まえると、英会話Ⅰ、英会話Ⅱにおいてこのスピーキングをより強化し、英会話Ⅱ修了時までAcademic Proficiencyを習得するようなプログラムを組み込む必要があるのである。その対策のひとつとしてLLの役割がさらに重要になってくるのである。次の章ではスピーキングを積極的に取り入れた、コミュニケーション・アプローチからのLL利用を考える。

III 目標レベル到達のためのLL利用

一 コミュニカティブ・アプローチによるタスク練習

従来のLLは、オーディオ・リンガルメソッドによるドリル、リピートが中心であった。この教授法による5つのスローガン：「言語は音声であって、書かれたものではない」「言語は一組みの習慣である。」「言語そのものを教え、言語については教えるな」「言語とはその言語のネイティブ・スピーカーが話すものをさし、こう話すべきであると誰かが教えるようなものではない」「言語はすべて異なる」(リバース 1987:42-45)のもとに、耳と口による学習に、LLは最適の機器であった。

教授法の変遷を経て、コミュニケーション・アプローチが盛んに採用されるようになると、LLへの関心は薄れ、その価値を危ぶむ声さえ聞かれるようになってきた。しかし、学生の手元にはテープレコーダーとモニターテレビがあり、教師側にはオーディオ・カセット、ビデオ、教材提示器、アナライザーなどがある。コンソールには、モニター、モデルヴォイス、ペアレッスンなど、さまざまな機能が備わっているとすれば、これをコミュニケーション・アプローチに応用し、より充実した語学教育の実現が可能であろう。

Task-based language lab activities enable the teacher to create communicative activities that are not possible in the classroom ; in this way they expand the teacher's options in providing comprehensible input in a given context. Language laboratories can further support communicative programs by providing teachers

the means, through recorded cassettes and random monitoring, to chart students' progress without raising the affective filter (Krashen, 1981). (Stone 1988 : 2)

サンプル タスク練習

Listening Comprehensionの教材を, LLでタスク練習に応用した例を, サンプルとして挙げる。

STUDENT'S TASK:

To listen to recorded descriptions and try to identify the disguised princess.

OUTLINE:

Students secretly choose a disguised princess among their classmates and record a description of the princess. Then students listen to as many different recordings as possible in a given time and identify the disguised princess.

INSTRUCTIONAL OBJECTIVES:

To review descriptions of people and learn new vocabulary dealing with clothes and things they are wearing.

PROCEDURE:

Explain the activity. Ask the students to pick up one of their classmates secretly. Give the students a couple of minutes to write notes.

Students record the description, rewind the tape and set the book mark (the 'memory button').

Tell the students to listen to as many tapes as possible in a given time.

Have students return to their seats. Ask them if they could identify the princess. Pick up one student and let him / her report what he / she heard. Finally ask the student who he / she guesses the disguised princess is. To check his / her answer, play the tape (with teacher's control) and have all the students

listen to it.

リスニングの教材で、まず聞き取りの練習をし、(ここまでは、従来のLLのリスニング練習と同じである。)それを上記のタスク練習に採用することにより、ジョンソン&モロウのいう3つの過程(インフォメーション・ギャップ、チョイス、フィードバック)を経験し、コミュニケーション能力を養うことができるのである(ジョンソン&モロー1984:57-68)。つまり1)他の学生の録音を複数人数短時間で聞くことで、お互いのインフォメーションギャップを知り、2)自分の課題録音の時点でチョイスを実行し、3)他の学生に自分の録音内容が正しく伝わったかどうかのフィードバックが可能となる。

教室でのタスク練習との区別を明らかにするためには、以下の疑問を問いかけながら問題の作成にあたることは言うまでもない。

1. Is this a lab-specific activity?
 - a. Is it dependent on technology? How?
 - b. Is it more easily or conveniently done in the lab?
How? / Why?
2. Does the activity coordinate with the lesson plan?
3. What is the extra-linguistic goal of this activity?
4. Will the students enjoy this activity?

(Stone : IALL Workshop Handout 1993)

IV まとめ

ネイティブスピーカーとの抱き合わせで行なわれているLLを使った英会話の授業について、それが英語の「聞く力」「話す力」の向上に役に立っているかどうかのアンケート調査で、「非常に役に立っている」と回答したものは1年目の学生が34.3%、2年目学生で36.1%あった。「少し役に立っている」の回答も含めると、LLが役に立っていると答えたものは、1年目で87.0%2年目学生で91.6%あった。LLの授業で取り入れているもので「非常に役に立っている」練習項目は、1、2年目ともに共通して、Small Talk, Pattern Practice, Pair Workの順になっている。リスニングよりもスピーキングを訓練するためにLLが役に立っ

ていると考えているのがわかる。

次にNAFSAのPROFICIENCY LEVELSを用いて、リスニングとスピーキングにおける現在のレベル、英会話II修了時までに到達したいレベルと大学卒業時までに到達したいレベルをたずねた。その結果によると、現在レベルではリスニングよりもスピーキングのレベルの方が低いと判断している。「英語が話せるようになりたい」と思う反面、現実にはなかなか思うように話せないとの意識が、リスニングよりもスピーキングのレベルを低く評価しているものと思われる。また、全員が卒業時までにはリスニング、スピーキングともにAcademic Proficiency Levelに到達したいと望んでいる。

従って、今後学生のニーズを考慮しつつFull Academic Proficiency Level到達を目標にするには、LL授業で従来考えられていたような意味を無視した文型練習の域を脱し、コミュニケーションをはかるための練習を取り入れる必要がある。それを実現するための方法として、Lee Ann StoneやRoberta Z. Lavineの提唱するコミュニカティブ・アプローチによるタスク練習がある。LLでなければできないタスク練習を豊富に取り入れることで、コミュニケーションのためのLL利用が可能となろう。

さらにこれからのLLを考えるならば、近年のテクノロジーの発達と教育効果を視野に入れながら、LLをオーディオレコーディングに限定せず、ビデオ、コンピューターと併せ利用することにより、その機能を拡大することが必要である。クラス単位でのLL利用から、インタラクティブな、個人のレベルに合わせたLLを考えるときである。

To be truly interactive, a tape program would have to respond to individual's needs, interests, and previous knowledge. (Swanson 1989: 44)

The language laboratory is ideally suited for promoting individualization of learning. (Schaepe & Barrow 1991: 18)

The "Ideal Learning Center of the Future" will have stations that

combine audio, video, graphics, and text in one presentation medium, hooked up to individual, local, and remote information sources. ...The materials presented on these stations will be available to students and teachers to browse through and combine at will. (Borchardt 1989 : 13)

[注]

- (1) これらの項目は、教室でのネイティブ教師の授業との抱き合わせで使用される教科書の指導項目である。従ってLLの効果を第一に考えて採用された教科書ではない。著者はそれを最大限「聞く力」「話す力」の養成のために利用している。

[参考文献]

- Borchardt, F. 1989. 'The Ideal Learning Center of the Future'. *Designing the Learning Center of the Future— Language Laboratories : Today and Tomorrow*. IALL. pp. 9 -13.
- 大学英語教育学会 1992 『大学設置基準改正に伴う外国語(英語)教育改善のための手引き(1)—JACET ハンドブッカー』
- ジョンソン K. & モロウ K. 1984 小笠原八重訳『コミュニカティブ・アプローチと英語教育』 桐原書店
- 小池生夫ほか 1983 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究 (I)—教員の立場—』
- 小池生夫ほか 1985 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究 (II)—学生の立場—』
- Lavine, R.Z. 1992. 'Rediscovering the Audio Language Laboratory : Learning Through Communicative Tasks'. *Hispania* 75. pp.1360 -1367.
- 松山正男 1993 「大学における英語教育の重要性」英語教育実態調査研究会 『21世紀に向けての英語教育』大修館 pp.50-56.
- リバース W. 1981 天満美智子ほか訳『外国語学習のスキル第2版』研究社出版
- Schaepe, R.H. & J.E. Barrow. 1991. 'Rejuvenating the language laboratory'. *IALL Journal of Language Learning Technologies*. Vol.24,

No.3. pp.15-24.

Stone, L.A. 1988. *Task-Based Activities : A Communicative Approach to Language Laboratory Use*. IALL.

Stone, L.A. 1989. *Task-Based II : More Communicative Activities for the Language Lab*. IALL.

Swanson, C. 1989. 'Technological advances in the language laboratory'. *Designing the Learning Center of the Future—Language Laboratories : Today and Tomorrow*. IALL. pp.43-44.

Williams, U. 1992. 'Some dinosaurs don't die, they evolve'. *IALL Journal of Language Learning Technologies, Vol.25, No.3*. pp.75-78.

吉永光明 1993 『L L A 第33回全国研究大会発表要綱』

THE ROLE OF THE LANGUAGE LABORATORY IN ENGLISH TEACHING

Keiko HAYASAKA

With the development of technology in the field of language teaching, attention was drawn away from the use of language laboratories (LL). In this study, a recent survey of English major students showed that LL was useful for English practice. However, they viewed LL as a tool for speaking proficiency more than audio practice. So, 'small talk task', 'pattern practice' and 'pair work' were preferred LL activities.

From survey responses on their university language goals, students aimed for academic proficiency levels in speaking and listening according to the NAFSA English Language Proficiency Chart. LL can serve to intensify their learning process. Adopting communicative task-based activities are strongly recommended in order to update language laboratory methodology.